

博士学位論文

<要約>

遊戯療法における遊ぶことについての心理臨床学的研究

2019年

田中秀紀

本研究は、遊戯療法においてクライアントが遊ぶことを通じて、なぜクライアントのこころのあり様に変化していくのかという素朴な疑問から着想された。遊戯療法における遊ぶことで何が生じているのかについては、ある意味自明なものであるために、その説明をすることが困難となっている。本研究は、遊戯療法における遊ぶことを捉え直す試みである。

序論では、「遊戯療法における遊ぶことの捉えにくさ」について論じた。遊戯療法は主に精神分析・ユング心理学・人間性心理学という三つの理論によって捉えられており、これらの三つの理論を概観した。遊戯療法の実践は、三つの理論を折衷し三つの理論を使い分けるという形で行われており、恣意的な実践が行われる可能性があることを指摘した。また、これまで為された遊戯療法の理論的検討とは、三つの理論の特徴を並べたり、それらの理論の共通点を抽出したりすることであり、これは理論と向かい合うこともなく、判断を保留しているあり方であると述べた。このような理論の捉え方は、遊戯療法の理論をモノとして扱うあり方であり、遊戯療法について十分な理論的検討がなされていない現状を指摘した。

そして、遊戯療法の理論化が困難な理由に、「遊ぶこと」について言語化し、そこから遊戯療法を捉える作業が不十分であることを挙げた。そこで遊戯療法における遊ぶことの治療的意味を概観したが、ここにおいても遊ぶことの意味は分類され、それぞれが独立したモノとして並べられていた。遊戯療法は遊ぶことを中心に据えている心理療法であるゆえに、遊ぶことそれ自体に生じている動きを捉える必要性を主張した。

第1章において、まず本研究の方法論を示した。本研究では、モノとして扱われていた遊戯療法の代表的な理論に入り込み、それらの理論を批判的に検討し、そこから遊ぶことそれ自体を捉え直すことを検討することとした。次に、遊戯療法事例において生じている遊ぶことそれ自体の働きを検討することとした。本研究は、まずは遊戯療法に関する理論に取り組み、次に三つの事例にあたり、遊戯療法における遊ぶことについての知見を積み重ねるような、探索的な形をとる。

第2節より、遊戯療法における遊ぶことの理論的検討に入った。まず、Huizinga, J.の遊び論を取り上げ、Huizinga, J.が挙げた遊びの形式的特徴を連関させることを試みた。遊びは実体化できるものではない運動であり、遊びにはある現実を置きかえる形象化・象徴化が働いていることが示された。また、遊びの時間と空間は限定され、遊びはそれ自体で完結する行為であることが示された。そして遊びの現実性には、遊びに夢中になると同時に、それが本物ではないという否定の意識が保たれていることが認められた。

第3節では、人間性心理学から遊ぶことを捉える試みとして、Gendlin,E.の体験過程理論を援用した弘中の仕事を批判的に検討した。弘中は遊ぶことの体験を「前意識的体験」を呼んだ。遊ぶことには確かに体験されているが意識的な水準では把握できない何かが生じるとし、この「前意識的体験」がクライアントの体験過程を促進すると説明された。この仕事によって導き出された、遊ぶことの意識的コントロールを超えた働きと、遊ぶことの象徴化を促す働き、そして遊ぶことの生々しい体験は、以降の章でも検討されるべき重要な視点であると指摘された。

第2章では、精神分析から遊ぶことを捉える試みを行った。Freud,A.は、遊ぶことに治療的な意味を認めなかった。Freud,A.にとって遊ぶことは分析家への陽性転移を起こさせる道具であるとみなされた。その一方で Klein,M.をはじめとする精神分析家は、遊ぶことを遊戯療法の根幹に据えた。精神分析では、母からの分離に主体が生じる契機をみており、失われた親密な対象の代わりとなる素材を見出し、それと遊ぶことで、主体は主体としての歩みを始めることが示唆された。また遊ぶことには、原初の象徴化の働きが認められた。遊ぶことは、母からの原初の分離を契機に、いかに個として生きるのかという課題と、内的現実と外的現実をどう関係づけていくのかという課題への、主体の取り組みであると考えられた。

内的な現実から遊ぶことを考えると、失われた対象の代わりである遊びの素材に主体は惹きつけられ、遊ぶことに没頭する。ここに内的な現実性^{リアリティ}に入る動きが認められた。また遊ぶ主体はこの内的な現実を常に否定してもいる。これについて Lacan,J.は、遊ぶことには生きた対象が単なる物体や音に変換されるという否定が働いていることを示した。また Winnicott,D.W.は、「原初の“自分でない”所有物」である移行対象と遊ぶことに注目した。移行対象と遊ぶことで、主体は外的現実の实在物と関わるため、常に客観的な時間と空間を意識する。この意識によって主体の全能的な幻想が否定されると説明された。それゆえ遊ぶことの現実性^{リアリティ}とは、内的な現実性^{リアリティ}に主体が深く入りながらも、客観的な外的現実の意識によってその現実性^{リアリティ}が否定されるという、二重の現実性^{リアリティ}であると考えられた。

そして、遊ぶことは外傷という即自的な体験が、象徴化によって対自的な体験に変容することであると同時に、その即自的な体験に受け身だった主体が、遊ぶことで能動的にその体験を操作することが生じることが指摘された。精神分析から遊ぶことを検討することで、遊ぶことは主体の生成と関係していることが示唆された。

第3章では、ユング心理学における遊ぶことを、Jung,C.G.自身の人形と石の遊びの体験を通じて検討した。遊ぶことは主体が遊びに委ね、むしろ遊びが主

体となることによって、意識が把握できない新しいものを創り出す動きであることが示唆された。また始めは Jung, C.G. を外傷的に揺さぶるイメージとして現れた第一質料が、遊びによって形を与えられることで、安心感を与える対象となり、主体を導くものへと変容することが示された。したがって Jung, C.G. における遊びとは、主体を決定づけるイメージとの関わりであると考えられた。そして遊ぶことにおいては、主体はイメージを自分自身から区別し、イメージが対自的なものとなると同時に、主体からそのイメージに関わる動きが生じると考えられた。このイメージにコミットするという主体の動きによって、そのイメージの現実性が立ち上がるということが指摘された。

また、Jung, C.G. が行った遊ぶ場所を閉じる動きについて考察した。閉じることで Jung, C.G. は、受動的に魂を享受する神話的主体のあり方を去り、魂と距離を作りつつ魂と関わる近代意識のあり方に移行したと考えられた。また遊ぶことそれ自体にも時間や空間を限定し、他の現実性を排除する否定の動きが生じており、遊ぶことにも神話的主体のあり方を去り、近代意識のあり方に移行する働きがあることが示唆された。また遊戯療法は、その内容としては物の魂が生き生きと現前するような仕掛けを用意しつつ、その場を限定することで、同時に物の魂を否定するような構造が仕組まれている点で、ユング派の心理療法と同じ方法論を用いていると考察された。

第4章では、事例をもとに「自閉症児における遊ぶことの生成」が検討された。自閉症は身体像が成立しておらず、自他の融合を保持しようとし、身体的分離や心理的分離を避けるあり方であると考えられた。それゆえ自閉症においては、遊ぶことそれ自体が生じていないと考えられた。ここでは遊ぶことそれ自体が生まれるプロセスと、遊ぶことによって主体と身体像が結び合わされる様子を考察した。A は遊戯療法が始まると母子分離によって大泣きする。そして母からの分離とセラピストとの融合を表現する遊びが生じた。これは、母から分離し否定を被った主体が生まれる遊びであり、同時に A の主体性と象徴を生じさせる遊びであると考えられた。これを端緒に、A は主体や象徴の構造それ自体を分節化していく遊びを展開したことを指摘した。それは在／不在や順序性、時間、上下の視点を体験する遊びであり、A は次第にこの形式を自ら操るようになった。そしてセラピストにくすぐられつつ、否定の言葉を自ら口ずさむ遊びを通して、A は主体として生まれる作業を行ったと考えられた。それは身体像としての主体と、自らの身体像から主体的に言葉を発する主体が、同時に生まれる遊びであると考えられた。自閉症児の遊戯療法においては、遊ぶことを通じて自らの身体像を作り、かつ自らの言葉を発する主体を生成すること、またそれらを生成する作業が《他者》であるセラピストと遊ぶことによってなされることが重要であると考察された。

第5章では、事例をもとに「遊ぶことによる語る主体の生成」が検討された。不登校状態で来談したBは、鏡像的な他者に過度に同一化するあり方を示し、自ら語ることに困難を抱えていた。ここでは、語るという行為に焦点を当てた「語る主体」と、語られた内容としての「語られる主体」という視点をもちつつ、遊ぶことを通じて語る主体が生成されていく過程が考察された。卓球は、鏡像的な他者と対峙する緊張感の中に入り、攻撃性や衝動をコントロールしつつも主体的に表現するというBの課題と同じ構造を有していた。Bは自らの衝動から距離を取り、衝動を対象化し把握するという語る主体の意識を練り上げていった。そして競い合う遊びにおいて、母ではなく私が行い、同時にその《結果》も母ではなく私が引き受けるという、母に包まれることを否定する動きが指摘された。それに加えて競い合う遊びに全力でコミットすることによって、Bはこの遊びに生じる不安の現実性に深く入り、かつBは語られる主体としての《結果》も引き受けた。これらの動きを通じて「語る主体と結びついた語られる主体」が生成したと考察された。さらに、競い合う遊びは次第に背景に退き、Bは面接で語るようになっていった。Bはこの遊びを充分に行うことを通じて、語りの形式や構造を身に付け、B自身が「語る主体と結びついた語られる主体」として、言葉で自らを表現するようになったと考えられた。

第6章では、事例をもとに「遊ぶことにおける入る動きと否定する動き」が検討された。前思春期における共同体や親から離れ主体として成立することへの葛藤が、遊ぶことを通じてどのように変容していくのかという視点で検討がなされた。Cは前思春期にあたる時期に、イライラや吐き気、登校渋り、強迫的なあり方など、大人の神経症に近い症状を呈し来談するに至った。遊戯療法では、無垢な世界に包まれ、生じてくる出来事にただ囚われるCのあり方と、内に蠢く攻撃的な衝動を避けていたために、それらを主体的に掴むことが難しいCのあり方が示された。Cは赤ちゃんの絵を描くことを通じて、母に包まれる世界の現実性に深く入る動きと同時に、個々のイメージから距離を取って全体として捉える動きが生じた。ここに「どこまでも出来事に没入していくと同時に、それを眺めているような二重性を持った主体」が生成したと考えられた。最終回でCはそれまで避けてきた「怖いもの」の箱庭を制作した。Cは体感として感じていた攻撃性を、玩具という形あるものに対象化し、怖いものが単なるモノとして見抜かれていった。それと同時に、怖いものに触れ、怖いものに向かい合うことでCには怖いものの現実性により深く入る動きも生じていたと考えられた。箱庭によって怖いものと遊ぶことが生じ、そこでは攻撃性に委ねていた主体がより分化し、怖いものの現実性に入りつつその現実性を否定し見抜く主体が生じたと考察された。

最終章にあたる第7章では、これまでの遊ぶことの理論的な検討に加え、三つの事例で行った遊ぶことの検討から、遊戯療法における遊ぶことを心理臨床学的に考察することを試みた。

まず、遊戯療法における遊べないことについて検討された。事例において、クライアントが遊ぶことができない事態を取り上げた。これらは、母子の融合状態や、身体的な感覚や、母なるものに包まれる世界に即自的に囚われているあり方と関係していると説明された。遊べないことでは、クライアントのあり方が遊戯療法の中に落とし込まれ、遊戯療法の場がクライアントの問題を扱う場となったことを示していると考察された。

次に、遊戯療法において遊ぶことが生じると、遊ぶことの中にクライアントのあり方が閉じられることを示唆した。遊ぶことによって即自的なあり方が対象化され、クライアントがそのあり方と対自的に向かい合い、関係を持てるようになることと説明された。つまり遊ぶことを通じて、クライアントは自らの課題に取り組むことが生じると指摘した。

そして、遊戯療法における遊ぶことについて、理論と事例の二つの側面から総合的に考察した。理論的には、遊ぶことによって、遊ぶことの現実性と同時に遊ぶ主体が立ち上がることが述べられた。そして遊ぶ主体にはその現実性に入るといふ動きと、その現実性を否定する動きが生じていることを指摘した。この遊ぶことの現実性を否定する動きについて、Lacan,J.においては生きた対象を否定する動きとして、また Winnicott,D.W.と Jung,C.G.においては、遊ぶことの現実性に完全に入ることと否定する動きとして捉えられたと指摘した。

次に各事例において、遊ぶことによって主体が生成する様を描くことを試みた。事例の検討を通じて、遊ぶことの現実性を否定する動きは、即自的な現実を否定する動きであるとともに、主体が否定を被る動きでもあることが認められた。つまり遊ぶことに、即自的に囚われていた自らのあり方を否定することが生じていると指摘された。このことから、遊戯療法における遊ぶことは、即自的に囚われていたものに主体が入ること、主体が囚われていたものを主体自ら否定する弁証法的な動きであることが示唆された。

続いて、遊ぶことが分化していく様について、事例に基づいて検討された。それまで主体を含む形で遊ばれていた遊びは消え失せると同時に、主体がその遊びの形式を使うようになることが示された。つまり遊戯療法において遊ぶことは、それ自体に進んで入ることによって、それ自体が消える運動であり、同時にそれ自体の形式がより高次の形式で主体に引き継がれる弁証法的な運動であると捉えられた。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べられた。遊戯療法の各理論の検討が充分ではないこと、遊戯療法において遊ぶことが自明なこととして捉え

られがちであったこと、遊ぶこと以外の遊戯療法における治療的な意味を検討する必要があること、遊ぶことが終わる遊戯療法の終結についての考察が必要であることが挙げられた。

(5976 字)